

令和2年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- | | |
|-----|------------------------------------|
| I | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び |
| II | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成 |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築 |
| IV | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成 |

道府県・政令市名【 京都府 】

学校名【 京都府立京都八幡高等学校（北） 】

<スポーツ庁テーマ>

1 実践テーマ	【 I・III 】
2 実施対象者	本校の3年生健康科学コース 27名
3 展開の形式	<p>(1) 学校における活動</p> <p>① 教科名 (保健体育科)</p> <p>② 行事名 (車いすバスケットボール)</p> <p>③ その他 ()</p> <p>(2) 地域における活動</p> <p>① イベント名 ()</p> <p>② その他 ()</p>
4 目 標 (ねらい)	<ul style="list-style-type: none"> 外部講師による特別講義を受け、障がい者の目線から障がいスポーツを学ぶ。また、一緒に実践することで、ユニバーサルな視点を育み、障がい者スポーツへの理解を深める。
5 取組内容	<p>① 「障がい者理解」をテーマに講義</p> <ul style="list-style-type: none"> 交通事故に遭い、車いす生活となってしまった経緯から車いす生活の実態など生の声を聞きました。 <p>② 車いすの操作方法を学ぶ</p> <ul style="list-style-type: none"> ストップ、ゴーのやり方。回転のやり方。バック走のやり方など、まずはボールを持たずに自由自在に車いすを操作できるように操作方法を学んだ。 <p>③ 車いすバスケットボールの技術練習</p> <ul style="list-style-type: none"> 車いすを操作しながらのドリブル、パス、パスの受け方、シュート、リバウンドと技術練習を行った。 <p>④ ルールの確認。試合</p> <p>車いすバスケットボールの試合でのルールの説明を受けた。その後、4チームに分けて総当たりでリーグ戦を行った。練習した成果を試すことができた。</p>

	<p><練習の風景></p>  <p><試合の風景></p> 
<p>6 主な成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 車いす生活されている方のお話を聞くということが初めてで、貴重なお話を聞くことができ、障がい者についての理解が深まった。 ・ 車いすバスケットボールの選手のプレーを間近に見られ、また、直接技術指導を受けたことで、車いすの操作はもちろんのこと、車いすを操作しながらのドリブルやシュートなど技術も格段に上達した。 ・ 車いすバスケットボール独特のルールがしっかり学べ、試合ができるまでに技術&知識を得ることができた。やはり、車いすバスケットボールの選手直接から指導を受けられたことは大きい。
<p>7 実践において工夫した点 (事業の特色)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本年度はコロナ禍の中での実施だったため、感染防止対策を徹底した。このような厳しい状況の中でも、車いすバスケットボールができたことは大きい。 ・ 車いすが10台と少ない中、生徒全員が車いすバスケットボールを学べるよう、講師の先生を2人体制とした。
<p>8 主な課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 車いすが10台と試合を行うにはギリギリの台数しかない。競技用の車いすはとても高価なため仕方ないことではあるが、あと10台、計20台あると、もっと活動量が増えて多くの生徒が一度にプレーができる。また、試合や練習もたくさんできるので、もっと車いすバスケットボールが楽しくなると考える。 ・ 車イスの消耗が激しく、安全面からも適宜メンテナンスが必要である。
<p>9 来年度以降の実施予定</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今後も課題点を改善し、長期にわたり継続していきたいと考える。

令和2年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書



- | | |
|-----|------------------------------------|
| I | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び |
| II | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成 |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築 |
| IV | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成 |

道府県・政令市名【 京都府 】

学校名【 京都府立京都八幡高等学校（北） 】

<スポーツ庁テーマ>

1 実践テーマ	【 III 】
2 実施対象者	本校のレスリング部員 2名 地域の中学生 5名 地域のダウン症者 7名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 () ② 行事名 () ③ その他 () (2) 地域における活動 ① イベント名 (ワクワクレスリング教室) ② その他 ()
4 目 標 (ねらい)	・ 障害者の自立・社会性を目指す＝ダウン症児者と親、他人との肌の触れ合いによる密接な絆、交流を強め、心身の発達を目指す。
5 取組内容	① アップ運動 ・ 二人組になり、様々な運動を行う。体を温め怪我を防ぐこと、体力を向上させることを目的とする。 ② 打ち込み ・ 二人組になりタックル練習を行う。ダウン症の生徒と高校生・地域の中学生がペアになる。ダウン症の生徒同士で組むときには、必ずその組に指導者・スタッフが横に付き、危険な状況を回避するよう努める。 ・ 構えやタックルの技術指導を行う。理解できるまで繰り返し指導を行う。 ③ 練習試合 ・ 2チームに分かれマット一面を使用し、高校生も入り練習試合を行う。試合を待っている者は自分のチームの応援を行う。 ※審判をつけて、怪我をしないよう危険な状況があれば早めに止める。

	<p>④ トレーニング 体力づくりでトレーニングを実施する。</p> <p>【練習の風景】</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p style="display: flex; justify-content: space-around;"> • 実戦練習 • トレーニング（腹筋） </p>
<p>6 主な成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 10年以上、月1回の練習を継続して行なっているため、仲間意識が高く強い絆で繋がっている。ダウン症の生徒や保護者が高校生や卒業生の試合に応援に来てくれることがあった。 • レスリングを通じて交流を深め、個々の良さを認め合うことができた。ダウン症の生徒の一人一人のペースを把握し、個々に合った指導や声かけを行なうことができていた。 • 中高生は優しいだけでなく、危険なことやルールで違反となることはダウン症の生徒が理解するまで何度も繰り返し注意し、安全に競技を行なうことへの意識が高まっていた。
<p>7 実践において工夫した点 (事業の特色)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 本年度はコロナ禍の中での実施だったため、感染防止対策を徹底した。このような厳しい状況の中でも、中高校生がダウン症の生徒に指導を行なうことができた。 • 個別指導を行った。指導相手を替えながら多くの選手と行うことで、その生徒の性格やレスリングのスタイルなど個性を理解させた。
<p>8 主な課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> • レスリング競技という中での交流のため、レスリング部員以外の生徒が参加をしにくい。また、知識が無いと怪我等の事故が起こるリスクが高くなる。 • ダウン症の生徒の多くは高校生より年上である。高校生の言葉のかけ方を注意していく必要がある。お互いの存在に感謝していけるような関係を築いていくことが大切である。 • 年々、ダウン症の生徒が減ってきている。原因としては、初年度から年齢層が高く、活動が困難となり引退する生徒が多くなってきた。また、ほとんどの生徒が何年も継続している生徒にで、新規でクラブチームに入ってくる生徒がいない。 • 本年度はコロナ感染拡大のために、年2回しか実施することができなかった。来年度はコロナも終息し、従来どおり月1回の教室開催ができれば良いと考える。
<p>9 来年度以降の実施予定</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 今後も課題点を改善し、長期にわたり継続していきたいと考える。